

アイロニー発話における推論過程

—関連性理論に基づく分析—

*池脇恵里子・安藤裕介

Inferential Processes of Ironic Utterances —A Study Based on Relevance Theory—

Eriko IKEWAKI Yusuke ANDO

【要旨】本稿は、これまであまり研究がなされてこなかった、Sperber & Wilson (1995) の「関連性理論を用いてアイロニーを分析する」という枠組みの中で、話し手の意図及び発話の含意をいかに導き出すことができるか、また、それは話し手と聞き手のそれぞれの立場において、いかに伝達され、いかに推論されるか、という過程を理論化し検証することを目的としたものである。

本稿は、先行研究として Grice (1975/1989), 安井 (1978), Leech (1983), Sperber & Wilson (1981) によるアイロニーの分析を取り上げ、それぞれの問題点を指摘した後、アイロニーが成立する際に、話し手と聞き手が遵守しているはずの前提条件として、協調の原理、関連性の原則、最適な関連性の見込みを取り上げ、さらに、これらの前提条件を基盤に、関連性理論の認知環境の修正 (既存の想定を削除・文脈含意の付加)、表意 (飽和・自由拡充)、推意を用いて、アイロニーの成立の推論過程を理論化する。

【キーワード】アイロニー、関連性理論、推論過程、Sperber & Wilson、表意、推意、含意、エコー

*久留米大学大学院比較文化研究科修了

序論

会話とは「ことば」によってなされる行為である。それは話し手と聞き手が意思疎通をしたり、感情を共有したり、発話の意味内容を理解したりすることによって成立する。しかしながら、単に発話の「字義通りの意味 (literal meaning)」を理解していれば、会話が成立するとは限らない。例えば、次の例を見てみよう。

- (1) 上司から飲み会に誘われて

My kid is absent from school with sickness.

(子どもが病気で学校を休んでいるんです。)

この場合、話し手は上司の誘いに対し、字義通りの意味では「子どもが病気で学校を欠席している」と言い、一見すると何の関係もないことを返答しているように思われるが、その含意において「飲み会には行けない」ということを伝達している。一方、違う見方をして、この発話が毎回断わっているのにもかかわらず、しつこく誘ってくる上司に対し発

せられたものであるとするならば「私はあなたと飲みに行きたくありません」と暗に示していると考えられることもできよう。

このように、発話の字義通りの意味に、話し手の意図や本心が隠されているということは日常的に起こり得る。では、聞き手はどのようにして発話の字義通りの意味には表れていない、話し手の意図や発話の含意を理解することができるのだろうか。

本稿は、このような問題提起を基盤に、含意をもつ発話の中でも特に、字義通りの意味では聞き手に対し賞賛的あるいは是認的でありながらも、本心は嘲笑や否認の意を示しているアイロニーを取り上げ、アイロニーが成立する際の話し手と聞き手における推論過程をそれぞれ理論化し、検証することを目的とする。

これまで研究されてきた伝統的なアイロニーとは、言語哲学者である Paul Grice によるものであり「アイロニーは発話の字義通りの意味とは反対の意味を伝え、聞き手に対し非難や嘲笑を示す」という定義である。たとえば、(2)を見てみよう。

(2) 仕事で裏切った同僚に対し

You are a splendid fellow.

(きみは良い友達だよ。)

この場合、話し手は本心と反対のことを言っており、聞き手に対し非難の意を示している。従って、(3)は(2)の含意となる。

(3) 含意：You are not a splendid fellow.

(きみは良い友達なんかじゃない。)

しかしながら、本稿は、このような Grice の定義に対し「発話の字義通りの意味の反対を意味するものだけが、帰結的な話し手の意図及び発話の含意ではない」という立場から分析を行う。さらに、本稿は、これまであまり研究がなされてこなかった、Sperber & Wilson (1995) の「関連性理論を用いてアイロニーを分析する」という枠組みの中で、話し手の意図及び発話の含意はいかに導き出すことができるか、また、それは話し手と聞き手のそれぞれの立場においていかに伝達され、いかに推論されるかという過程を理論化し、検証することを目的とする。

第1章は、先行研究として、Grice (1975/1989)、安井 (1978)、Leech (1983)、Sperber & Wilson (1981) のアイロニーの理論について概観し、問題点を指摘する。第2章では、「関連性理論」の関連性の原則、最適な関連性の見込み、表意、推意を用いて、これらの原則がアイロニーの推論過程に適応できることを証明する。最後に、第3章では、アイロニーが成立する際の話し手と聞き手のそれぞれにおける推論過程を理論化し、検証する。

第1章 先行研究

1-1 アイロニーの使用と効果

おおよその見当をつけるために、辞書にもとづくアイロニーの定義を挙げておきたい。

- (4) Irony: A figure of speech in which the intended meaning is the opposite of that expressed by the words used; usually taking the form of sarcasm or ridicule in which laudatory expressions are used to imply condemnation or contempt. (my emphasis)

(*The Oxford English Dictionary, SECOND EDITION Volume VIII*)

皮肉：意図された意味が、使用されることばによって表されたものと反対である比喩的表現。通常、賞賛を表す表現が嫌味や嘲笑を含意するために使われる、嫌味や嘲りの形式である。(下線部は引用者による)

一般的な理解としてはこれで十分である。しかし、注意すべき点が1つある。日本語と英語におけるアイロニーの概念の捉え方の違いである。両者とも「皮肉」であることには違いないが、日本語における皮肉とは、英語でいう‘sarcasm’ (嫌味) により近い概念である。

例えば (5) を見てみよう。

- (5) 仕事でミスばかりする後輩に対して

Shoot! How long have you been working here?

(またか、きみは入社して何年目なんだい。)

この場合、話し手は、聞き手に「入社して何年目なのか」という質問を投げかけているのではないということは状況から見てすぐにわかるだろう。ミスばかりする後輩に対し「いったい君は何度ミスをすれば気が済むんだ!」と叱咤しているのである。このように、個人の感情を傷つけようとする気持ちが強く、極めて直接的に非難を加える表現法を‘sarcasm’ という。

一方、アイロニーとは、(4) でも先述したように、話し手が聞き手に対し非難や嘲笑の心的態度をもちつつも、表面的にはそれがわからないようにするために、賞賛あるいは是認しているかのように見せかける表現法である。では、なぜ話し手は直接言えば簡単に済むものをわざわざ回りくどい言い方をして伝えようとするのであろうか。これについて安井 (1978:160) は次のように述べている。

- (6) どうして、わざわざ、スペードでないものをスペードと呼ぶような回りくどいことをするのかというと、一つには、「スペードでない」という、一般的には、好ましくないことを単刀直入に言いたくないからであり、もう一つには、「スペードとお思いかもかもしれませんが、そして、もしもそうなら結構なんです、本当はその正反対。」という屈折を含む言い方のほうが、より痛烈であるからであると思われる。

つまり話し手は、たとえ相手に本心がばれてしまったとしても「私はスベードじゃないなんて一言も言った覚えはありませんよ」などと、対人関係上の逃げ道を作り、社会的な立場が脅かされないよう体面を保つことができるのである。

さらに、逆屈折を含む言い方における効果については次の(7)を見てみよう。

(7) 足が太めの友人(女)に対して

You have skinny legs.

(足が細いね。)

(7) において、話し手は、友人の足を本心では「太い」と思っていながらも、字義通りの意味では「細いね」と賞賛している(一般的に、女性は足が細いと言われた方が嬉しいと感じるであろう)。(6)でも述べられているように、アイロニーの効果として、単刀直入に「足が太いね」と言うよりも、アイロニカルに「足が細いね」と逆屈折を含んだ言い方をした方が、相手により強い痛烈さを与える。

さらに、辻(2001:23)は、上記の効果に加え、アイロニーには次のような効果もあると述べている。

- (8) たとえば「きれいな顔だね」と皮肉を込めている場合と、「みにくい顔だね」と直接的にいう場合を比べてみよう。皮肉の場合には、たとえそれが皮肉と分かっているとしても、「冗談でしょ」とか「嘘ばかり」と切り換えすことが可能である。つまり、ここで問題となっているのは、発話者の態度であり、それを〈皮肉〉と取るか〈冗談〉あるいは〈嘘〉と取るかの境界線はあいまいなのである。そして、このあいまい性が、皮肉を当てられた当事者を心理的に「救う」ことがある。ところが、「みにくい顔だね」は、直接に、そして決定的に「言い切つて」いるわけであり、あいまい性という逃げ道は閉ざされてしまう。

このように、発話状況や対人関係上における認知度や親密度により、聞き手が受けるアイロニーの効果は異なる。しかしながら、アイロニーに共通して言えることとして、話し手が何らかの社会的あるいは個人的な理由で、聞き手に直接伝えたくない、あるいは伝えることができないと考えていることが存在することは間違いないであろう。

本稿は、アイロニーの推論過程を理論化することを目的としたものである。アイロニーの使用や効果がいかなるものであるかについて詳細に論じることはしない。しかしながら、筆者は、それらを Leech (1983) の丁寧さの原理 (PP) (1-4参照) の作動によるものであるとみなし、今後議論を進めていくこととする。

1-2 Grice の分析-CP と会話の格率-

先述したが、伝統的なアイロニーの定義として、Grice は「アイロニーとは発話の字義通りの意味とは反対の意味を伝え、聞き手に対し非難や嘲笑を示すものである」と主張している。また、アイロニーとは字義通りの意味を超えた「会話の含意 (Conversational

Implicature)」であると見なし、アイロニーの伝達する意味を語用論的な側面から取り扱っている。さらに、その基盤となる概念として「協調の原理 (Cooperative Principle, 以下 CP と表記する)」と「会話の格率 (Maxims of Conversation)」を挙げ、アイロニーは会話の格率の質の第 1 格率 (偽りであると信ずることを言うな) が表面的に違反された事例にあたりと主張している。

CP とは以下の通りである。

(9) CP (Cooperative Principle)

We might then formulate a rough general principle which participants will be expected (*ceteris paribus*) to observe, namely: Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged.

(Grice 1989:26)

あなたが従事している会話において、会話に貢献する機会が生じる段階で要求されるような会話の貢献をせよ、また、その段階における話の交換の目的や方向によって要求されるような会話の貢献をせよ。

(佐々 2009:198)

つまり、CP とは、一言で言うならば「会話の参加者は目下の中心話題に協力せよ」という趣旨の原理に集約できるものである。さらに、Grice は、CP に従事する際、会話の内容がどのようなものであれ、話し手にせよ聞き手にせよお互いに守らなければならないルールがあると考え、CP を支える具体的な会話の公理として、(10) のような 4 つのカテゴリーを展開する。これを「会話の格率」という。

(10) Maxims of Conversation

Maxims of Quantity: Give the right amount of information: i.e.

1. Make your contribution as informative as is required.
2. Do not make your contribution more informative than is required.

Maxims of Quality: Try to make your contribution one that is true: i.e.

1. Do not say what you believe to be false.
2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

Maxims of Relation: Be relevant.

Maxims of Manner: Be perspicuous: i.e.

1. Avoid obscurity of expression.
2. Avoid ambiguity.
3. Be brief. (avoid unnecessary prolixity)
4. Be orderly.

(Grice 1989:26-27)

会話の格率

量の格率：適当な量の情報を提供せよ。

1. 自分の貢献に（会話の現在の目的に）必要なだけの情報量を含めよ.
2. 自分の貢献に必要とされている以上の情報を含めるな.

質の格率：自分の貢献を真実に基づいたものにせよ.

1. 偽りであると信ずることを言うな.
2. 十分な裏付けのないことを述べるな.

関係の格率：関連性を持たせよ.

様態の格率：明瞭に話せ.

1. 不明瞭な表現を避けよ.
2. 曖昧性を避けよ.
3. 簡潔に話せ. (不必要に冗長にならないように.)
4. 順序正しく話せ.

(深田 1990:119-120)

具体的に、もう一度 (2) を見てみよう.

(2) 仕事で裏切った同僚に対し

You are a splendid fellow.

(きみは良い友達だよ.)

先述したように、この場合話し手は、同僚に対し字義通りの意味では「良い友達だよ」と言っているが、それが本心でないということは文脈（以下、コンテキストという）から判断できるだろう。また、同僚は同僚で、話し手を裏切ったにもかかわらず、話し手が自分のことを「良い友達だ」と発していることに明らかに違和感を覚えるだろう。このことから、(2) は会話の格率の質の第1格率（偽りであると信ずることを言うな）が表面的に違反されており、アイロニーであるということがわかる。

Griceによれば、我々はCPが作動しているはずだという前提のもとづいて話し手の発話を解決しようとしており、もし聞き手が、話し手が真実と食い違うと思われることを言ったと感じたり、発話の場面に適していないと感じると、次にそこには別の意図された意味があるに違いないという想定を導き出し、推論を開始する。そして、そうした質の第1格率の違反からアイロニーであることが推測される。

では、ここでいう話し手の意図及び発話の含意とはいったい何であろうか。Griceの定義によれば、(2)の含意は(3)である。

(3) 含意：You are not a splendid fellow.

(きみは良い友達なんかじゃない.)

従って、これを単純化し、論点化すると次のようになる。

(11) アイロニーは、質の第1格率に表面的に違反し、字義通りの意味と反対の意味を伝え、否定的な感情や態度を表す表現と密接に関連する言語表現法である。

しかしながら、後の多くの研究者たちの議論において、Grice は、含意の同定の説明に対しその曖昧さを指摘される。また、(2) がアイロニーであるために必要な、発話における反対の要素（これを *not-p* という）、たとえば、慣習的に逆の意味を告知するアイロニカルな音調や否認的な態度などの存在についての言及がないとの批判を受ける。これについて Grice (1989:53) は補足する形で次のように述べている。

- (12) It was suggested to me that what should have been mentioned in my account was, first, a familiarity with the practice of using a sentence, which would standardly mean that *p*, in order to convey that *not-p*..., and second, an ironical tone in which such utterances are made, and which (perhaps) conventionally signifies that they are to be taken in reverse.

次のことが私に提案された。私の説明の中で言及されるべきであったものは、まず、第1に、一般的に、*not-p* を伝えるために、*p* を意味するような文を使用する慣習をよく知っていることであり、第2は、そのような発話がなされる際のアイロニクの音調、そして（多分）慣習的にそのような発話が反対に受け取られるべきであることを表すアイロニクの音調のことである。

(村越 2000:33)

まず、第1の点で指摘されている発話の反対の要素 *not-p* を伝えるために使用される慣習とは (13) のようである。

- (13) a. [短足気味の友人に対して] You have long legs. (足が長いね.)
b. [ダックスフントを見て] He has long legs. (足が長いね.)

(岡本 2003:16)

これについて岡本 (2003:16) は、(13) はどちらも事実の反対の命題であるにもかかわらず、(13a) はアイロニーと解釈するのが容易であるのに対し、(13b) をアイロニカルに取るのは容易ではなく、単なる嘘の陳述であるように思われると述べている。つまり、ダックスフントが短足であるということは周知の事実であり、多くの人にとってダックスフントの足が長いと想定することは容易ではないからである。従って、内田他 (1999:296) によれば、(13b) は、アイロニーの対象がいけないということになり、アイロニーの失敗となる。

次に、第2の点で指摘されているアイロニカルな音調に関して、Grice は、鼻にかかった声や速度を落とした話し方などの慣用的な表現が用いられる場合も認めなければならないが、基本的にはそのような特有の音調はないとするのが正しいと主張している。これについて、Householder (1971:297) は次のように述べている。

- (14) One of the necessary ingredients of irony is that the reader should not be able to demonstrate its presence conclusively.

アイロニーはアイロニーであるためには、アイロニーであることがあからさまにわ

かつてはならない。

(岡本 2003:16)

つまり、もしアイロニーの存在を決定的に明示している音調があるならば、それはアイロニーとしての効果を発揮しないということになる。なお、顔の表情やしぐさなどもアイロニーを定義づける反語信号の要素になると考えられているが、本稿は、あくまで言語上のみにおけるコンテキストを材料にアイロニーを考察することを目的としており、そのような言語学的に明示することが容易でない要素については、今後取り扱わないこととする。

ここまで、Griceのアイロニーの理論について見てきた。しかしながら、これには問題点がある。次の(15)の例を見てみよう。

(15) 人を中傷してばかりいる意地の悪い友人に対して

You are another Mother Teresa.

(あなたはマザーテレサだ。)

(15)において、話し手は、友人をマザーテレサという貧しい人たちを救った心優しく尊敬すべき人物に置き換えることによって、アイロニーを示している。なお、この場合、発話の含意が「あなたはマザーテレサではない」という字義通りの意味の反対を伝えているのではないということは明らかである。つまり、話し手は、マザーテレサであるか、そうでないかということ聞き手に伝えようとしているのではなく、字義通りの意味の反対を超えた「含意」を汲み取らせようとしているのである。従って、(15)の含意は、たとえば(16)のようになる。

(16) You are spiteful.

(きみは意地悪だね。)

[Or: I'm tired of you. (うんざりだよ。)]

このことから、Griceのアイロニーの理論は、このままでは十分に説明できない場合があるということがわかる。

1-3 安井の分析

(15)のような字義通りの意味の反対を超えた含意とはいったい何であろうか。また、それはどのようなプロセスによって導き出されるのであろうか。安井(1978)は、これについて次のように述べている。

(17) 言内の意味の存在しないところに言外の意味が存在することはない。

安井は、発話の字義通りの意味を「言内の意味」、含意を「言外の意味」と定義し、言外の意味について、それは言内の意味を介することによって導き出されるものであり、言内

の意味が手掛かりとなることによって、何らかの意味で関連のある言外の意味に至りつくことができると主張している。つまり、(16) は、(15) の字義通りの意味の反対「あなたはマザーテレサではない」を介して導き出されたものである。

さらに、安井はアイロニーの成立条件として、以下の2つを提示している。

(18) アイロニーの成立条件

第1条件：言内的意味の反対の指示条件を満たす場面状況

第2条件：話し手側における、嘲笑、嘲り等の否認的な心的態度

具体的に、次の例を見てみよう。

(19) [何日も続くじめじめした長雨にうんざりしながら]

The weather has really cleared up. I feel cheerful.

(まさに気分が晴れるような天気だ。)

この場合、[何日も続くじめじめした長雨にうんざりしながら] という場面状況が (18) の第1条件を満たし、「うんざりしながら」という否認的な心的態度が第2条件を満たす。従って、安井によれば (19) はアイロニーである。

では (19) の含意とはいったい何であろうか。Grice の定義によれば、発話を字義通りの意味の反対「まさにうんざりするような天気だ」とすればよい。しかしながら、次のような場合はどうだろうか。たとえば、この発話が外で遊ぶことが待ち遠しくてたまらない少年によるものであれば、「早く雨が止んでほしい」とか「外に出られなくてつまらない」といった類のものが考えられるだろうし、主婦によるものであれば、「洗濯物が乾かなくて困る」とか「買い物に行けない」といった類のものが考えられるだろう。このように、含意には、たとえ字義通りの意味が共通していたとしても、発話に伴うコンテキストによって微妙なズレが出てくる場合がある。

このようなズレの問題をどう取り扱うかという問題はあるが、本稿は、アイロニーにおけるすべての発話の含意とは「字義通りの意味の反対」が基盤となって導き出されるものであると主張する。このことは、安井の考え方を否定するものではなく、異なる説明の可能性を提示するものである。従って、含意が字義通りの意味の反対を超えている場合、それをいかに展開し導き出してゆくかということが課題となる。この点に関して、本稿は、Sperber & Wilson (1995) の「関連性理論」の枠組みにおける分析が最も有力であると考える。関連性理論による分析については、第2章で詳しく述べることにする。

1-4 Leech の分析－IP－

アイロニーを分析するにあたり、これまで多くの言語学者たちが Grice を支持してきたが、Leech (1983) も同じく Grice の CP に基づき、それを発展させる形でアイロニーを展開している。次の Tom と Mary の会話を見てみよう。

(20) Tom: It seems that Jack divorces. His wife has parental authority and the expense of bringing up children is...

(ジャックが離婚したらしいよ。親権は奥さんの方で、養育費も…)

Mary: You have really wide knowledge.

(あなたって本当に博識ね。)

(20) において、Mary は、字義通りの意味では Tom に対して賞賛しているが、本心はその反対を意図しており、「あなたって余計なことばかり知っているのね」とか「あなたの話にはうんざりだわ」などと Tom を嘲笑している。つまり、Grice の定義によれば、Mary は、字義通りの意味では CP と質の第 1 格率に違反しているが、その含意においてそれらを遵守しているということになる。これについて、Leech (1983:142) は次のように述べている。

(21) It (Irony) does so by superficially breaking the CP, but ultimately upholding it.

(Leech 1983:142)

アイロニーは「表面的には協調の原理を破りながら、最終的にはそれを支持することによって、その機能を果たすのである。」

(池上他 1987:207)

Leech はこれをアイロニーの原理 (Irony Principle, 以下 IP と表記する) と呼び、以下のように定義している。

(22) If you must cause offence, at least do so in a way which doesn't overtly conflict with the PP, but allows the hearer to arrive at the offensive point of your remark indirectly, by way of implicature. (my emphasis)

(Leech 1983:82)

もしどうしても相手の感情を傷つけない時には、少なくとも、丁寧さの原理に明白な形でそむくのではないようなやり方で行うこと。ただし、そのやり方は、聞き手の方が、あなたの述べたことで感情を害することになるようなポイントを含意を通じて理解することが可能であるようなものこと。(下線部は引用者による)

(池上他 1987:115)

Leech は、Mary が Tom に直接本心を述べていないのは、(22) の下線部の丁寧さの原理 (Politeness Principle, 以下 PP と表記する) が遵守されているからであると述べている。PP とは、対人関係のコミュニケーションを円滑に進める際に、話し手が聞き手に用いる原則 (心配り) であり、次のように分類化される。

(23) PP (Politeness Principle)

1. Tact Maxim (in impositives and commissives)
 - (a) Minimize cost to *other* [(b) Maximize benefit to *other*]
2. Generosity Maxim (in impositives and commissives)
 - (a) Minimize benefit to *self* [(b) Maximize cost to *self*]
3. Approbation Maxim (in expressives and assertives)
 - (a) Minimize dispraise of *other* [(b) Maximize praise of *other*]
4. Modesty Maxim (in expressives and assertives)
 - (a) Minimize praise of *self* [(b) Maximize dispraise of *self*]
5. Agreement Maxim (in assertives)
 - (a) Minimize disagreement between *self* and *other*
 - [(b) Maximize agreement between *self* and *other*]
6. Sympathy Maxim (in assertives)
 - (a) Minimize antipathy between *self* and *other*
 - [(b) Maximize sympathy between *self* and *other*]

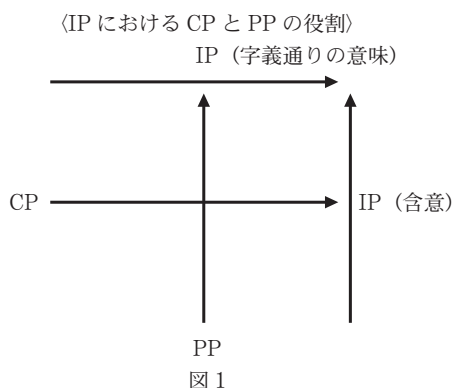
(Leech 1983:132)

丁寧さの原則

1. 気配りの原則 (行為賦課型と行為拘束型において)
 - (a) 他者に対する負荷を最小限にせよ.
 - [(b) 他者に対する利益を最大限にせよ.]
2. 寛大性の原則 (行為賦課型と行為拘束型において)
 - (a) 自己に対する利益を最小限にせよ.
 - [(b) 自己に対する負担を最大限にせよ.]
3. 是認の原則 (表出型と断定型において)
 - (a) 他者の非難を最小限にせよ.
 - [(b) 他者の賞賛を最大限にせよ.]
4. 謙遜の原則 (表出型と断定型において)
 - (a) 自己の賞賛を最小限にせよ.
 - [(b) 自己の非難を最大限にせよ.]
5. 合意の原則 (断定型において)
 - (a) 自己と他者との意見の相違を最小限にせよ.
 - [(b) 自己と他者との合意を最大限にせよ.]
6. 共感の原則 (断定型において)
 - (a) 自己と他者との反感を最小限にせよ.
 - [(b) 自己と他者との共感を最大限にせよ.]

(池上他 1987:190)

Leech は、IP とは、CP と PP に寄生的な関係にあると指摘する。以下図 1 は、Leech (1983:83) を参考に IP を図に表記したものである。



これは、話し手側から見たアイロニーの「表」と「裏」の関係を表したものである。まず、縦軸 PP を見てみよう。これは、話し手が聞き手に表面的に働きかける矢印であり、発話の字義通りの意味を表す。つまり、話し手は、聞き手に対し丁寧な態度を示すために、横軸 CP を破り PP を貫くことによって、IP を表す。一方、横軸 CP は、話し手が聞き手に暗示的に働きかける矢印であり、含意を表す。つまり、話し手は、表面上では聞き手に PP を用いているが、実際は否認や嘲笑を示しており、縦軸 PP を破り CP を貫くことによって、IP を表す。

具体的に、次の例を見てみよう。

- (24) P: Someone's eaten the icing off the cake.
 (誰かがケーキのアイシングを食べてしまったわね.)
 C: It wasn't ME.
 (ぼくじゃないよ.)

(池上他 1987:111-112)

たとえば仮に、P は、アイシングを食べた犯人が誰であるかはわからないが、C が怪しいと思っているとしよう。この場合、P が PP を用いて C に対して丁寧な態度をとるとすれば、直接の名指しを避けるということになる。つまり、P は 2 人称代名詞 'you' を用いて C の感情を直接的に傷つけるのではなく、誰かを特定しない不定代名詞 'someone' を用いることによって、PP を示している。(24) は、「様態の格率」が表面的に違反されている例であるが、IP の定義によればこの場合もアイロニーであると見なすことができる。

次の (25) は「量の格率」が表面的に違反されている例である。

- (25) A: We'll all miss Bill and Agatha, won't we?
 (私たちはみんなビルとアガサがいなくなって淋しく思うわね.)
 B: Well, we'll all miss BILL.
 (うん、みんなビルがいなくなって淋しく思うでしょうね.)

(池上他 1987:111)

(25) において、A は、Bill と Agatha の両方がいなくなってしまうことについて淋しいと感じており、発話に付加疑問文を用いていることから、B に同意を求めているということがわかる。しかし、A に対する B の返答は、Bill についてのみ答えており、Agatha については何も言及していない。従って、B の発話は、A の発話に対する返答として内容が不十分であることから、「量の格率」に違反していると言える。しかしながら、もし B が、Agatha に対する否定的な気持ちを直接発することを避け、Agatha に対して無礼に振る舞う行為について代価を支払うことを回避しようとしているのであれば、たとえ CP を破ったとしてもこの場合における B の返答は適切であると言える。

次は「質の格率」が表面的に違反されている例である。

- (26) Bob: I got 40 marks on the test.
 (この前の数学のテスト、40点だったよ.)
 Tom: It's 60 marks to full marks! Almost!
 (満点まであと60点か！おいしい！)

(26) において、Tom は Bob に対し、字義通りの意味では「おいしい！」と賞賛的な発言をしているが、実際はその反対を意図しており、「半分以下の点数でおいしいわけがない」とか「勉強不足だ」などと Bob を嘲笑している。従って、IP の定義によれば、(26) もまたアイロニーであると見なすことができる。

以上、IP において CP と PP がどのような役割を果たしているのかを会話の格率を用いて論じてきた。Leech は、これまで Grice が述べてきた定義 (11) に対し、「質の格率」以外の格率が違反される場合もアイロニーになり得ると見なし、アイロニーが「発話の字義通りの意味の反対を意味する」という常識を取り扱った。

しかしながら、本稿は、アイロニーはあくまで「反動的」であり、「発話の字義通りの意味の反対を介することによって導き出される」という立場を支持しているため、(26) のような「質の格率」が違反された発話のみをアイロニーであると見なす。この立場を取ることが、アイロニーをより厳密に理論化する際の説明力向上に繋がると思われる。

1-5 Sperber & Wilson による分析—アイロニーとエコー発話—

Sperber & Wilson (1981) は、言語を「使用 (use)」と「言及 (mention)」の2つに分類し、アイロニーは「言及」の一種であるとして、これまでとは異なった新しいアイロニーの説明理論を展開した。使用と言及は以下のように区別できる。

- (27) 「パン」は小麦粉でできている。
 (28) 「パン」は英語で bread と言う。

(27) では、「パン」という語が、パンという対象を表象している「使用」の事例であるのに対し、(28) では、「パン」という語が、そのもの自身を表象している「言及」の事例である。言及については、さらに「直接的」と「間接的」に分類することができる。これ

は、いわゆる「直接話法」と「間接話法」と考えるとわかりやすいであろう。具体的に次の例を見てみよう。

- (29) Tom: What did he say to you?
 (彼は君になんて言ったの?)
 Lucy: (a) He said, 'I love you.'
 (「君を愛している」と.)
 (b) He said that he loved me.
 (私を愛している, と.)

(辻 2001:26)

この場合、(29a)の'I love you.'とは、He (Lucyのボーイフレンド)がLucyに直接言及したものであり、(29b)は、LucyがHeの発話を理解し、その発話の意味内容を間接的に言及したものである。

Sperber & Wilsonは、(29b)のような間接的な言及について、さらに「報告(reporting)」と「エコー(echo)」の2つに分類する。報告とは(29b)のように、話し手が先行する発話の意味内容を理解し、聞き手に伝達する言及である。一方、エコーとは、報告の内容に関して話し手の心的態度を伴う言及である。エコーについて、具体的に次の例を見てみよう。

- (30) Tom: It's almost spring.
 (もうすぐ春だね.)
 Lucy: [感慨深く] Right, Spring will be here soon.
 (そうだね, もうすぐ春だ.)
- (31) Bob: I am really a genius.
 (僕って本当に天才だな.)
 Bill: [馬鹿にした笑みを浮かべながら] Yeah, you are really a genius.
 (そうだね, 君は本当に天才だよ.)

エコーとは、話し手が、聞き手の発話や思考をおうむ返しにする表現法である。(30)の場合、LucyはTomの発話に対し、発話の字義通りの意味と心的態度の両方において同調している。しかしながら、(31)の場合、Billは、字義通りの意味ではBobに同調し賞賛しつつも、心的態度は[馬鹿にした笑みを浮かべながら]を伴っており、実際はBobを嘲笑している。Sperber & Wilsonは、エコーの中でも特に、(31)のような聞き手の発話や思考に対する話し手の心的態度が、否認や嘲笑を示すものをアイロニーと見なしている。従って、これらを論点化すると以下ようになる。

- (32) Genuine irony is echoic, and is primarily designed to ridicule the opinion echoed.

(Sperber & Wilson 1995:241)

真のアイロニーはエコー的であり、本来、エコーされた意見を嘲笑するように意図されている。

具体的に、次の例を見てみよう。

(33) 男：It's a lovely day for a picnic.

(ピクニック日和だね。)

[2人はピクニックに行く。雨が降る。]

女：[皮肉たっぷりに] It's a lovely day for a picnic, indeed.

(本当にピクニック日和だわね。)

(内田他 1999:292)

この場合、女は男の発話をエコーしており、発話に嘲笑的な心的態度 [皮肉たっぷりに] を伴っていることから、アイロニーであると見なすことができる。つまり、女は明らかに「ピクニック日和ではない」と思っており、「あなたのせいで一日が台無しになった」とか「こんなことなら家で本を読んでいればよかった」などと意図していることが考えられよう。

次の例を見てみよう。

(34) Peter is quite well-read. He's even heard of Shakespeare.

(ピーターはかなりの読書家である。彼はシェイクスピアのことを耳にしたことだつてあるんだから。)

(内田他 1999:296)

(34) は、先行文と後続文が「シェイクスピアを耳にしたことがある人なら誰でもかなりの読書家である」という不合理な論理に至る発話である。聞き手は、最初は通常の陳述文として発話を受信するが、発話の内容をエコー的に再解釈し、再び仮説を立て直すことによって、「シェイクスピアということばを聞いたことがあるだけでは、読書家であるとは言えない」つまり「Peter は読書家ではない」という発話の含意及び話し手の意図を見出すことができるのである。内田 (1999:295) によれば、Sperber & Wilson は、このような、思考をエコー的に再解釈する場合についてもアイロニーであると見なしている。

次の例を見てみよう。

(35) A: You know, I can crush rocks with my bare hands.

(僕は素手で石を砕くことができるんだからね。)

B: Yeah, and the sun rises in the west.

(そうかい。それじゃ太陽は西から昇るね。)

(深田 1990:131)

(35) において、B は A の発話に対し「そうかい」と返答し、表面的には是認しているかのような発言をしているが、実際は、A の発話と何の関係もない、また明らかに間違っただけを言及することによって、A の発話が同程度に間違っているということを暗に示している。この場合も (34) と同様に、A は、B の発話から不合理な論理を導き出し、思考をエコー的に再解釈し、「太陽は西から昇らない」つまり「A は素手で石を砕くことなんてできない」という含意を見出す。

このように、Sperber & Wilson は、聞き手の発話や思考を嘲笑的な心的態度をもってエコーするだけでなく、不合理な論理に至る発話を用いることによって、聞き手に思考をエコーさせ、否認や嘲笑を示す場合についてもアイロニーであると見なしている。

では、次の場合はどうであろうか。洋服店にて、Mary と Emily は同じズボンを試着し、鏡の前に並ぶ。背が高くモデル体型の Mary が格好良く履きこなしている一方で、Emily はサイズが合わずまいちである。

(36) Mary: I suit this well!

(よく似合ってる！)

Emily: [鼻であしらいながら] Absolutely, you suit it well!

(確かによく似合っているわ！)

(36) において、Emily の発話は、Mary の発話に対しエコー的であり、否認的心的態度を示す付帯状況 [鼻であしらいながら] を伴っていることから、(32) のアイロニーの条件を満たしていると言える。しかしながら、この場合、Emily は自画自賛する Mary を鼻であしらいながらも、本心は Mary に対して是認的である。つまり、「格好良く履きこなすスタイルの良い Mary が羨ましい」と思っているのである。と同時に嫉妬心を表に出したくないという背反感情も兼ね備えているのである。その意味で、通常のアイロニーとは異なっていると言える。

アイロニーとは、字義通りの意味では聞き手に対し是認的・賞賛的であるが、その含意において否認・嘲笑的な心的態度を示す言語表現法である。春木 (2007:78) は、(36) のような、相手の肯定的な点を否定したり、本心であるのに本心でないというような感情をもつ発話について 'sarcasm (嫌味)' のカテゴリーに分類されると述べている。従って、(32) は次のように言い換えることができる。

(37) アイロニーとは、(a) 話し手が、否認あるいは嘲笑的な心的態度を伴って、聞き手の発話や思考をエコーするか、(b) 聞き手が、話し手の不合理な論理に至る発話から、思考をエコーして再解釈するかのどちらかであると言える。なお、話し手は、発話の字義通りの意味では PP を遵守しているが、その含意において CP 及び「質の格率」を遵守している。

次章では、発話を聞き手の認知的な観点から解明することを目標とした Sperber & Wilson の「関連性理論」が、アイロニーの推論過程においていかに関連していくかを考察し、検証する。

第2章 関連性理論におけるアイロニーの分析

2-1 関連性の原則

「関連性理論 (Relevance Theory)」とは, Sperber & Wilson (1995) によって提唱された理論であり, 聞き手がいかに発話を推論し解釈するか, というメカニズムを認知的な観点から解明することを目標としたものである。

内田他 (1999:147) によれば, 聞き手は, 聞き手にとって関連のある情報 (発話) にだけ注意を払う傾向があり, また, その情報 (発話) を処理する際, あらゆるコンテキストを参照するのではなく, その中で最もありそうだとと思われる特定のコンテキストを選択し, その中で情報 (発話) を処理 (解釈) してゆく。これを「関連性の認知原則」という。

(38) Cognitive Principle of Relevance

Human cognition tends to be geared to the maximisation of relevance.

(Sperber & Wilson 1995:260)

関連性の認知原則

人間の認知は, 関連性の最大に適合するようにできている。

一方, 話し手は, 聞き手の注意を引くつもりで発話している以上, 話し手の能力と興味を両立させる範囲で, できる限り関連性の高いものを伝達することを目指しており, 聞き手もその情報が, 聞き手にとって注意を引くに値する情報, あるいは関連性を有する情報であることを期待している。つまり, 話し手と聞き手は, 情報を処理する際, お互いに代価と報酬のバランスを取るよう努めており, 最小の処理労力で, 最大の認知効果を得ることを目的としているのである。これを「最適な関連性の見込み (Presumption of Optimal Relevance)」という。

(39) Presumption of Optimal Relevance

- a. The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.
- b. The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.

(Sperber & Wilson 1995:270)

最適な関連性の見込み

- a. 明示的な刺激 (発話) は, 聞き手がそれを処理する労力に見合う程度に十分な関連性がある。
- b. 明示的な刺激 (発話) は, 話し手の能力と興味に適合する最も関連性のあるものである。

さらに, Sperber & Wilson は, 上記の概念にもとづき「関連性の伝達原則」を規定する。

(40) Communicative Principle of Relevance

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(Sperber & Wilson 1995:271)

関連性の伝達原則

すべての明示的伝達行為は、それ自身の最適の関連性を見込みを伝達する。

会話とは、話し手と聞き手の協調的作業であり、発話の意味内容が明示的であろうと非明示的であろうと、話し手と聞き手の間には常にCPが作動しているという前提がある。そして、両者がCPに従事して会話にのぞんでいる限り、その発話は、話し手が聞き手にあらゆる点を考慮した上で最善であると想定して選び出されたものであり、聞き手もまた、その発話が聞き手にとって最小の処理労力で最大の認知効果を得ることができるものと想定して推論を開始するのである。つまり、会話が成立する際には、話し手と聞き手の相互において、CPと関連性の原則と最適な関連性を見込みが遵守されている必要があるということになる。

〈会話の成立におけるSとHの前提条件〉

(話し手：以下、Sと表記、聞き手：以下、Hと表記する)

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. SとHは、CPに従事している。 2. SとHは関連性の原則及び最適な関連性を見込みに従事している。 |
|---|

表 1

2-2 アイロニーにおける認知環境の修正

認知環境とは、一言で言うならば、個人を取り巻く個々のコンテクスト（世界）のことである。我々は、各々、家族・地域社会・宗教のような異なる所属をもち、また、記憶力・効率性・感性のような能力も異なる。東森他（2003:15）によれば、会話における話し手の意図とは、聞き手の認知環境を修正することである。この修正方法として、Sperber & Wilsonは、「既存の想定強化」、「既存の想定削除」、「文脈含意の付加」の3つを挙げている。本稿は、アイロニーにおける聞き手の認知環境の修正方法について、既存の想定削除と文脈含意の付加が適用できると見なし、これを実証する。

具体的に、次の例を見てみよう。以下は、映画を観終わった後のEmilyとBillの会話である。

(41) Emily: What an emotional movie!

(なんて感動的な映画なの！)

Bill: [あくびをしながら] Yes, it was a very emotional movie! I couldn't stifle yawns.

(ああ、本当に感動的な映画だったね！あくびを抑えられなかったよ。)

この場合、Bill は Emily の発話をエコーし、字義的には Emily に共感しているが、「あくびをしながら」という否認的な付帯状況や、「映画に感動してあくびが抑えられなかった」という論理的に不合理な発話を用いていることから、実際は「感動的な映画ではなかった」という反対の意味合いを意図していると考えられる。たとえば、このとき Emily が、すでに (42a) という想定を心の中にもっていて、Bill も同様に感じていると思って発話しているとしよう。その場合、Emily の認知環境 (旧情報) は、Bill の発話 (新情報) によって、以下のように修正されることとなる。

- (42) a. What an emotional movie! (旧情報)
 b. Yes, it was a very emotional movie! I couldn't stifle yawns. (新情報)
 c. It was not a very emotional movie. ((42a) と (42b) の不合理から得られる文脈含意)
 d. 既存の想定 (42a) の削除

ここでは、Bill 自身から発せられた新しい想定 (42c) の方が、これと矛盾する Emily の想定 (42a) よりも強く、それに取って代わることによって文脈が修正される。

次の例を見てみよう。

- (43) This restaurant is very good. After all, the chef is British.
 (ここのレストランの料理はとてもおいしいよ。なんとと言っても、シェフがイギリス人だからね。)

(43) において、聞き手が発話をアイロニーであると認識するためには、「料理」と「イギリス人」という単語に関連する文化的背景 (一般的に、イギリスの料理がまずいと言われているのは有名な話である) が認知されている必要がある。この場合、話し手は字義的には「料理がおいしい」とレストランを賞賛しているのにもかかわらず、それは「シェフがイギリス人だからだ」と言い、一般的には賞賛しているとは言えない、論理的に不合理な発話を用いることによってアイロニーを示している。従って、聞き手の認知環境の修正は以下のように行われる。

- (44) a. This restaurant is very good. After all, the chef is British. (旧情報)
 b. British chef does not cook very well. (想起される新情報：情報価値の点で)
 c. This restaurant is not very good. ((44a) と (44b) の不合理から得られる文脈含意)
 d. 既存の想定 (44a) の前半部分の削除

(44) において、聞き手は、最初は話し手の一連の発話を通常の陳述文として受信する。しかし、長期記憶から想起される新情報として (44b) が引き出されることにより、(44a)

が不合理な論理であることに気付き、思考をエコーして再び解釈を行う。つまり、言語内的意味をもつものとして受信された旧情報（44a）に、記憶から想起された新情報（44b）が付加されることによって導き出された文脈含意が、（44a）の反対の意味合いをもつ（44c）である。

本節では、認知環境の修正方法である「既存の想定削除」と「文脈含意の付加」を用いて、発話を反対の意味合いに導くことができることを実証してきた。しかしながら、本稿は、アイロニーでは「発話の字義通りの意味の反対を意味するものだけが、帰結的な話し手の意図及び発話の含意ではない」という立場をとっており、そのことを立証するため、次節では「字義通りの意味の反対」が展開されるさらなる推論過程を理論化していく。

2-3 表意と推意

関連性理論において、発話によって伝達される想定は「表意 (explicature)」と「推意 (implicature)」の2つに分けられる。これらは、それぞれ発話の明示的意味と非明示的意味に相当する。具体的に (45) の例を見てみよう。

- (45) Peter: Would you like a cup of coffee? (コーヒーはどう?)
 Mary: It keeps me awake. (目が覚めるわ。)

(東森他 2003: 23)

東森他 (2003:23) によれば、この場合、明示的に伝達されている意味は「コーヒーを飲むと目が覚める」というものであるが、たとえばこの発話が、眠る直前に発せられたものであるならば、「コーヒーはいらない」と意図されたものになるであろう。これは非明示的に伝達されている意味である。内田他 (1999:221) は、表意と推意について次のように述べている。

(46) 明示性

発話 U によって伝達される想定は、それが U によってコード化される論理形式の発展であるとき、かつその場合のみ明示的 (すなわち、表意) である。

(47) 非明示性

発話 U によって伝達された想定であるが明示的でないものは、非明示的 (すなわち、推意) である。

(46) において、表意の基本となるのは、発話の表出命題である。表出命題とは、発話の字義通りの意味によって意味論的に表出された命題である。一方、表意とは、明示的に伝達された表出命題を展開し、語用論のプロセス (一義化、飽和、自由拡充、アドホック概念) によって富化されることによって導き出されるものである。ここで、4つの語用論のプロセスについて概説しておこう。まず、一義化とは、発話に用いられている言語形式が複数の語義をもっている場合、その語義が1つに選択され、決定されることをいう。たと

えば、bank には銀行と土手の 2 つの意味があるが、それは一義化によってどちらかに意味づけられる。飽和は、指示付与と表出命題の復元の 2 つの側面をもつ。たとえば 'It's the same.' という発話において、It とは何であるかという値を決定することを指示付与といい、表出命題の復元は、as what (何と同じなのか) が決定されることである。自由拡充とは、飽和のような特定の言語要素の要求ではなく、より自由に語用論的に何らかの要素を補うことをいう。たとえば、'Tom drinks. (Tom は酒を飲む)' を自由拡充的に解釈するならば、'Tom drinks alcohol habitually. (Tom は習慣的に酒を飲む)' と表すことができる。最後に、アドホック概念とは、語彙概念がコンテキストに合うように語用論的に調整されたその場限りの概念をいう。以下の 4 つのプロセスから、筆者は、「字義通りの意味の反対」を超えた含意を導き出す原則として、飽和と自由拡充を適応することができると思われ、これを実証する。

一方、推意とは、東森他 (2003:50) によれば、発話によって伝達される想定のうち表意でないもの、つまり、非明示的に伝達された想定を推論のみによって導き出す語用論的な想定である。それは人間の百科事典的記憶から呼び出されたり、記憶の想定スキーマから必要な場合に作り出されたりする。アイロニーは、話し手の意図や発話の含意が非明示的に表された言語表現法である。従って、推意によって導き出されるものであると考えられる。

Sperber & Wilson (1995:194-195) は、推意を「推意的前提 (implicated premise)」と「推意的結論 (implicated conclusion)」の 2 つに分類している。推意的前提とは、結論を導き出す根拠となるものであり、確固としたものである。一方、推意的結論とは、話し手と聞き手の認知環境や発話のコンテキストにより演繹されるものであり、心的あるいは認知的な解釈である。

本稿は、推意的前提を「字義通りの意味の反対」であると思われ、それを表意 (飽和・自由拡充) 及びコンテキストによって展開したものを推意的結論と思われ。

具体的に、次のアイロニーの例を見てみよう。デートに遅刻してきた Peter と Mary の会話である。

(48) Peter: I am really sorry. I was delayed by a traffic jam.

(ごめん。車が渋滞していて遅れちゃったんだ。)

Mary: [睨みをきかせながら] Oh, never mind!

(あら、いいのよ!)

この場合、Mary の発話は、字義的には Peter に対し是認的であるが、実際は、否認的な付帯状況 [睨みをきかせながら] を伴っており、「いいわけがない」と反対の意味合いを意図している。この場合、Peter の認知環境の修正方法は以下ようになる。

(49) a. Oh, never mind! (旧情報)

b. 付帯状況：睨みをきかせながら (新情報)

c. It's not alright. ((49a) と (49b) の不合理から得られる文脈含意)

d. 既存の想定 (49a) の削除

(49) において、Peter は、Mary の発話の字義的な意味 (49a) をアイロニー的要素である付帯状況 (49b) と相互作用させることで、Mary が怒っているということに気づき、文脈含意 (49c) を見出す。従って、これと矛盾する先に形成された既存の想定 (49a) は、削除されることとなる。

次に、(49c) で見出された字義通りの意味の反対は、推意により、以下のように展開される。

- (50) a. It's not alright. (推意的前提)
 b. 飽和・自由拡充による語用論的拡充
 c. You are rude. (推意的結論)

(50) において、字義通りの意味の反対は推意的前提 (50a) として、飽和 (It's not alright since you were late.) と自由拡充 (I believe that it's not alright since you were late for the date with me.) により、たとえば下線部のような語用論的拡充がなされる。さらに、拡充された (50b) は、話し手と聞き手の認知環境や彼らを取り巻くコンテキストにもとづき、たとえば (50c) のような極めて心的な推意的結論となる。

しかしながら、本稿は、アイロニーでは「発話の字義通りの意味の反対を意味するものだけが、帰結的な話し手の意図及び発話の含意ではない」という立場であり、ゆえに、もし話し手が字義通りの意味の反対 (推意的前提) を意図しているならば、それが話し手と聞き手にとっての帰結的な含意であり、すべての含意は推意的結論によるものであるというわけではないと考えている。従って、アイロニーの成功は、話し手の意図あるいは発話の含意が、話し手と聞き手の相互で正しく顕在化することであると考えられる。

第3章 アイロニー発話における推論過程

第2章では、会話が成功する際に、話し手と聞き手がもっているはずの前提として、「関連性の原則」と「最適な関連性の見込み」を取り上げた。また、話し手が、聞き手の認知環境を修正する方法として「既存の想定削除」と「文脈含意の付加」を、さらに、発話の字義通りの意味の反対を超えた含意を導き出す原則として「表意 (飽和・自由拡充)」と「推意」を取り上げ、これらの原則が、アイロニーの推論過程においていかなる効果をもたらすかについて検証してきた。また、これらの関連性理論の諸原則に伴い、Grice の CP と Leech の PP についても、アイロニーを成功に導く際の重要な役割を担う原則であるということも述べた。

本章は、これらの原則にもとづき、話し手と聞き手のそれぞれの立場から、アイロニーはいかに伝達され、いかに推論されるのかという推論過程を理論化することを目的とする。以下の (51) と (52) は、アイロニーにおける話し手と聞き手の推論過程である。

- (51) 話し手におけるアイロニー発話の推論過程 (以下、話し手を S、聞き手を H と表記する)
 (a) S は、「関連性の原則」・「最適な関連性の見込み」・CP を遵守している。

- (b) S は、H の言動あるいは S と H が共通の認知環境をもつ第 3 者の言動に対し、H に否認的・嘲笑的な心的態度を伴った発話を伝達することを意図する。
 - (c) S は、S の意図及び発話の含意が偽りないという証拠及び理由を保有している。
 - (d) S は、S の意図及び発話の含意を伝達することにより、H の認知環境を修正したい。
 - (e) S は、表面的には PP を用いて、S の意図及び発話の含意が H に直接的にはわからないようにしたい。
 - (f) アイロニー的要素を伴った発話を行う。
 - (g) S の意図及び発話の含意が、S と H の相互で正しく顕在化する。
- (52) 聞き手におけるアイロニー発話の推論過程（以下、話し手を S、聞き手を H と表記する）
- (a) H は、「関連性の原則」・「最適な関連性の見込み」・CP を遵守している。
 - (b) H は、S の明示的刺激（発話）に気付き、それを受信する。
 - (c) H は、発話の表出命題を理解する。
 - (d) H は、認知環境の修正（「既存の想定削除」及び「文脈含意の付加」）及びアイロニー的要素により（52c）の反対を見出す。（＝推意的前提）
 - (e) H は、（52d）を表意（「飽和」・「自由拡充」）により展開する。
 - (f) H は、（52e）を推意により展開する。（＝推意的結論）
 - (g) S の意図及び発話の含意が、S と H の相互で正しく顕在化する。

具体的に次の例を用いて解説しよう。映画 *Going the Distance* より、Garrett がレストランにて Waiter にワインを注文するシーンである。

- (53) Waiter: It's a Sunshine Harbor? It's the house wine.
 （それは Sunshine Harbor だったと思います。自家製のワインです。）
- Garrett: How would you describe it?
 （どんなワインなんだい？）
- Waiter: Um, it's okay. You know. Well, there you go.
 （えーと、普通ですかね。まあ、試してみてください。）
- Garrett: All right. Well done. Well played. I think the lady and I will partake of the Sunshine Harbor…… per your glowing recommendation.
 （なるほどね。君は口が上手いね。熱心なオススメトークに彼女も僕ももう酔っちゃったよ。）

(53) において、Garrett は「口が上手いね」、「熱心なオススメトークだ」と字義的には Waiter を賞賛しているが、実際には、Waiter は Sunshine Harbor（ワイン）について「普通です」としか述べておらず、賞賛しているとは言えない、明らかに論理的に不合理な発話を用いてアイロニーを示している。以下は、話し手 Garrett の推論過程である。

(54) Garrett におけるアイロニーの推論過程

- (a) Garrett は、「関連性の原則」・「最適な関連性の見込み」・CP を遵守している。
- (b) Garrett は、Waiter の発話に対し、否認的・嘲笑的な心的態度を伴った発話を伝達することを意図する。
- (c) Garrett は、自らの意図が偽りないという証拠及び理由を保有している。
- (d) Garrett は、自らの意図を伝達することにより、Waiter の認知環境を修正したい。
- (e) Garrett は、表面的には PP を用いて、Garrett の意図が Waiter に直接的にはわからないようにしたい。
- (f) アイロニー的要素を伴った発話を行う。
- (g) Garrett の意図及び発話の含意が、Garrett と Waiter の相互で正しく顕在化する。

まず、(54g) すなわちアイロニーの成功を目指すためには、Garrett と Waiter の間で、(54a) に挙げる原則が遵守されていなければならない。つまり、Garrett は、その発話が Waiter にとってあらゆる点を考慮した上で最善の発話であると想定して選び出したものであり、一方、Waiter も Garrett の発話が最小の処理労力で、最大の認知効果を得られることを期待して推論を開始する。

次に、(54b)、(54c) において、Garrett は、Waiter の発話に対し、否認や嘲笑を示すことを意図しており、そこでは「Waiter が Waiter としての仕事を全うしていない」という偽りない証拠と理由が保有されている。次に、(54d)、(54e) において、Garrett は、(54c) の理由により Waiter の認知環境を修正することを目論むが、ガールフレンドがいる手前か、Waiter の体面を保たせるためなのか、あるいは Garrett 自身の体面を保つためなのか、直接的に Waiter にそれを伝達することを望まない。つまり、Garrett は、表面的には PP を支持しているということになる。

しかしながら (54f) において、Garrett は、Waiter に対し明らかに論理的に不合理に至る発話を用いており、このアイロニー的要素によって Waiter に嘲笑を伝達することを意図している。こうして、最後に (54g) において、Garrett の意図が Waiter との間で相互に顕在化されることによって、アイロニーは成立する。

一方、聞き手 Waiter の推論過程は以下のものである。

(55) Waiter におけるアイロニー発話の推論過程

- (a) Waiter は、「関連性の原則」・「最適な関連性の見込み」・CP を遵守している。
- (b) Waiter は、Garrett の明示的刺激（発話）に気づき、それを受信する。
- (c) Waiter は、発話の表出命題を理解する。
- (d) Waiter は、認知環境の修正（「既存の想定」の削除）及び「文脈含意の付加）及びアイロニー的要素により (55c) の反対を見出す。（＝推意的前提）
- (e) Waiter は、(55d) を表意（「飽和」・「自由拡充」）により展開する。
- (f) Waiter は、(55e) を推意により展開する。（＝推意的結論）
- (g) Garrett の意図（発話の含意）が、Garrett と Waiter の相互で正しく顕在化

する。

この場合も (54a) と同様に、(55g) を目指すためには、Garrett と Waiter の間で、(55a) が遵守されていなければならない。まず、(55b)、(55c) において、Waiter は、Garrett の発話を受信し、発話の字義通りの意味を理解する。次に、Waiter は、(55d) において、以下のように認知環境の修正を行い、(55c) の反対を見出す。

(55d)

- a. Well done. Well played. I think the lady and I will partake of the Sunshine Harbor…… per your glowing recommendation. (旧情報)
- b. Um, it's okay. You know. (想起される新情報：情報価値の点で)
- c. Your recommendation is not good. ((55d-a) と (55d-b) の不合理から得られる文脈含意)
- d. 既存の想定 (55d-a) の削除

(55d) において、Waiter は、Garrett の発話の字義的な意味 (55d-a) と、それを受信したことにより記憶から想起された自身の発話 (55d-b) を相互作用した結果、Garrett が賞賛しているのではないということに気付く。このことから、Waiter は、Garrett の発話 (55d-a) と想起された新情報 (55d-b) が論理的に不合理であることに気づき、文脈含意 (55d-c) を見出す。従って、これと矛盾する先に形成された既存の想定 (55d-a) は、削除されることとなる。

次に (55e) において、(55d-c) で見出された字義通りの意味の反対は、推意的前提として、飽和 (Your recommendation about the wine is not good as a waiter.) と自由拡充 (I believe that your recommendation about the wine is completely not good as a full-fledged waiter.) により、たとえば下線部のような語用論的拡充がなされる。拡充された (55e) は、(55f) において、Garrett と Waiter の認知環境や彼らを取り巻くコンテクストにもとづき、たとえば「きみの接客の落ち度は僕のジョークによって救われただろう」とか「せっかくのデートなのにきみのおかげで良い雰囲気が台無しになるじゃないか」のような極めて心的な推意的結論が見出される。先述したが、アイロニーの帰結的な含意について、もし Garrett が推意的前提 (55d) を意図しているのであれば、それが Garrett と Waiter にとっての帰結的な含意であり、その含意は推意的結論によるものであるわけではないと考える。従って、(55g) において、Garrett の意図及び発話の含意が Waiter との間で相互に顕在化されることによって、アイロニーは成立する。

これらの推論過程を見てわかるように、アイロニーは暗示的側面の強い言語表現法であるため、発話の行き先や解釈は、聞き手に委ねられることになる。また、意図や含意は、話し手の心意を反映するものであるため、その解釈は必ずしも容易とは言えない。しかしながら、話し手は、聞き手が発話の字義通りの意味にごまかされるような人物ではないことや話し手のコントロールにもとづいて発話を推論することが可能な人物であることを想定して発話しており、聞き手も発話をそっくりそのまま正確に、また確かな証拠をもって復元することはできないにしても、話し手との間に相互に存在する共通の認知環境 (相互

認知環境)によって、それと似通ったものを反映させることができるのである。これについて、座間(2003:70)は、アイロニーの解釈は、日常発話の延長線上に分け隔てなく、一様に説明されるものであると述べている。本稿は、アイロニーにおける字義通りの意味の反対を超えた含意、すなわち推意的結論について、話し手と聞き手の相互に共通する認知的な要素によって産出されるものであると考えている。

結論

本稿は、これまであまり研究がなされてこなかった、Sperber & Wilson (1995)の「関連性理論を用いてアイロニーを分析する」という枠組みの中で、話し手の意図及び発話の含意をいかに導き出すことができるか、また、それは話し手と聞き手のそれぞれの立場において、いかに伝達され、いかに推論されるか、という過程を理論化し、検証することを目的としてきた。

また、本稿は、先行研究としてGrice (1975/1989)、安井(1978)、Leech (1983)、Sperber & Wilson (1981)によるアイロニーの分析を取り上げ、アイロニーが成立する際に、話し手と聞き手もっているはずの前提条件として、関連性の原則、最適な関連性の見込み、CPを取り上げ、さらに、これらの前提条件を基盤に、関連性理論の認知環境の修正(既存の想定削除・文脈含意の付加)、表意(飽和・自由拡充)、推意を用いて、アイロニー成立の推論過程を理論化した。

しかしながら、アイロニーの言語現象は非常に複雑であり、その解釈は、話し手と聞き手の親密度や信頼関係、発話状況など、様々な要素によって異なるため、アイロニーの含意を狭義の言語学でのみ導き出そうとしても、十分に解決できない部分があるという結論に至った。従って、今後は、上記の問題点を補うべく、対人関係的修辭に關係する文化的、社会的、言語的環境等を枠に入れて、このテーマをさらに追求していきたいと考える。

参考文献

- 新井恭子(2007)「もう一つの詩的効果—関連性理論におけるテキストの分析—」『文体論研究』53号 13-24.
- 鄭基成(1998)「言語的アイロニーについて」『英語学論説資料』第34号第2冊分 168-177. 論説資料保存会, 2002年.
- 深田淳(1990)『プラグマティックスとは何か』産業図書株式会社, 東京.
- Grice, Paul H (1975) "Logic and Conversation," Peter Cole and Jerry L. Morgan ed, *Syntax and Semantics Volume 3 Speech Acts*, Academic Press, New York.
- Grice, Paul H (1989) *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, London.
- Householder, Fred W (1971) *Linguistic Speculations*, Cambridge University Press, London.
- 春木茂宏(2007)「アイロニーと嫌み—周辺のアイロニーから見る「嫌み」を導き出す要

- 因一『近畿大学文芸学部論集』第18巻2号 23-44.
- 東森勲・吉村あき子 (2003)『英語学モノグラフシリーズ21 関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』研究社, 東京.
- 上林順錦 (2001)「言外の意味の範囲—ジョークの語用論試論 (II) —」『英語学論説資料』第35号第1分冊 785-790. 論説資料保存会, 2003年.
- 清塚邦彦 (1998)『論理と会話』勁草書房, 東京.
- 小木曾友美 (2003)「間接的な言い回しについて—ポライトネスを中心に—」『英語学論説資料』第38号第2分冊 1-15. 論説資料保存会, 2006年.
- 國分俊宏 (2007)「字義の意味と推論—関連性理論をめぐる—」『駿河台大学文化情報学部紀要』第14巻第1号 1-18.
- Leech, Geoffrey N (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman, London. 池上嘉彦・河上誓作 (訳) (1987)『語用論』紀伊國屋書店, 東京.
- 松井正道 (1997)「アイロニーについて—語用論的考察—」『茨城女子短期大学紀要』第24巻 43-56.
- 村越行雄 (1990)「会話含意算出の為の推論過程—グライスの推論形式に対する評価—」『跡見学園女子大学紀要』第23号 33-57.
- 村越行雄 (2000)「アイロニー：伝統的なアプローチと最近のアプローチ (1)」『跡見学園女子大学紀要』第33号 15-47.
- 村越行雄 (2001)「アイロニー：伝統的なアプローチと最近のアプローチ (2)」『跡見学園女子大学紀要』第34号 11-41.
- 緒方隆文 (2002)「アイロニーの公式」『神戸山手女子短期大学紀要』45号 51-69.
- 岡本雅史 (2003)「アイロニー発話の認知的分析—発話理解とコミュニケーションの統合モデルに向けて—」京都大学人間環境学研究科学位論文
- 佐々正治 (1999)「協調の原理の再考察—Attardo と Israeli の見解と日常会話分析—」『英語学論説資料』第41号第2冊分 197-209. 論説資料保存会, 2009年.
- Sperber, Dan & Wilson Deirdre (1981) "Irony and the Use-Mention Distinction," (Peter Cole ed.) *Radical Pragmatics*, Academic Press, New York.
- Sperber, Dan & Wilson, Deirdre (1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford. 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (共訳) (1999)『関連性理論—伝達と認知—第2版』研究社, 東京.
- 高原脩・林宅男・林礼子 (2002)『プラグマティックスの展開』勁草書房, 東京.
- 辻大介 (1997)「アイロニーのコミュニケーション論」『英語学論説資料』第33号第2分冊 21-39. 論説資料保存会, 2001年.
- 内田種臣・木下裕昭 (1986)『意味論と語用論の現在』理想社, 東京.
- 渡辺政徳 (1995)「ジョークと関連性理論—「ディセプティブ」ジョークのメカニズムの語用論的分析—」『英語学論説資料』第31号第2分冊 292-299. 論説資料保存会, 1999年.
- 安井稔 (1978)『言外の意味』研究社, 東京.
- 米沢好史 (1997)「アイロニーはどのように理解されるのか：文脈と発話の立場がアイロニー発話の理解に与える効果」『和歌山大学教育学部紀要』第47巻 35-44.

座間直樹 (2003) 「アイロニー表現とエコー発話」『神奈川大学大学院言語と文化論集』第10巻 33-74.